

「目をさましている僕」(ルカによる福音書一二章三五〜四八節)

1 備えて待つ

今日の箇所、弟子たちに対するイエスの言葉として、前の段落のつづきですが、一つのまとまりをもったところです。

ここでも、譬えが使われています。譬えは、本来分かりやすくするためのものではないけれど、譬えがいくつか使われていること、また話しがいろいろ展開していることなど、少し分かりにくくなっているかも知れません。

イエスはその何をここで言おうとしているのか、そのため、どんな譬えを使っているのか、はじめに少し説明して、それから今日の箇所を読むことにしたいと思います。

ここでイエスは、十字架以前であるにもかかわらず、十字架の先のこと、つまり復活し天に上げられ、そこからもう一度世に來られるということまで先取りし、それを前提に語っています。

言い換えれば、イエスが天にあつて、この地上におられないとき、教会がイエスの再来を待っているとき、このときを、私どもはどのように歩んでいくべきか、イエスご自身がいま語っておられるのです。

そのために用いられている譬えは、婚宴に出かけている一人の主人と、留守を守る僕(しもべ)たちの話です。主人は、留守のあいだの家の管理を、またその家で働いているたくさんの僕たちのお世話を、「管理人」(四二節。口語訳「家令」)に任せます。当時のローマ社会では、管理人は、僕、つまり奴隷も自由人も、どちらもないようですが、今日のこの箇所では奴隷のようです。留守を守る大勢の僕たちの上これをまとめる僕がいたわけです。

問題は、この主人が、婚宴の席から、いつ戻ってくるか、管理人にも、ましてその下にいる僕たちにもまったく分からないということ。それがこの話の一つのポイントです。「泥棒がいつやって来るか」(三九節)分からないように分からないということ。です。

さてこうした状況の中で、留守をあずかった者たちは、どのようにすべきなのでしょう。おそらくその答えは、私どもの人間的な常識による答えと、それほど違ったものではないと思います。実際、今日の聖書箇所でイエスが語っていることは、当然のこととしてだれにも分かることでした。

ひと言でいえば、忠実である、ことです(四二節)。主人の帰りがいつになるか分からなくても、いつ帰ってきてても、託されたことを忠実に果たし、きちんと出迎えるということ。です。

そうした留守をあずかる僕たちの在り方、その姿勢について、イエスは今日の最初のところで次のように教えています。

腰に帯を締め、ともし火をともしないさい(三五節)。

今日の箇所、イエスは譬えを重ね、展開しながら語っていますが、その主旨は、この最初の言葉に、すべて語られているように思います。

少しこの言葉の背景を説明すると、「腰に帯を締め」という言葉は、何かをするに当たって、気を引き締めて、備えるように、それを命じる言葉として聖書でよく使われます。裾（すそ）の長い衣服ですから、腰帯を締めることは、実際最初になされるべきことでした。

昔、イスラエルの民が、モーセに率いられてエジプトを脱出したときです。いよいよエジプトを去る夜、過越の食事が、各家庭でなされます。そのとき神はこう命じています、「それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にして、急いで食べる」（出エジプト二二・一一）ように。あるいは、イエスが、十字架の死を間近にしたとき、腰に手ぬぐいをまとい、弟子たちの足を洗ったというシーンを私は思い出します（ヨハネ福音書一三章）。腰に帯を締め、ではありませんが、イエスは、腰に手ぬぐいをまいて、他人（ひと）の足を洗う奴隷の仕事をなさったのです。

「ともし火をともし」についても、私どもはすでに、この福音書で、ともし火をともして、入ってくる人に光が見えるように燭台の上に置けという、イエスの教えを聞いています（八・一六、一一・三三）。腰に帯をしめ、ともし火を高く掲げて、主人の帰るのを待つ、それに備えること、それは、確かに、ペトロら、弟子たちに語られたものでした。

2 忠実で賢い管理人

イエスのここでの教えを、いま私は、イエスがもう一度世に来られるときのことを想定して、それまでの時間を、教会は、どのように歩むのか、またその心構えについて、聖書は記していると申しました。

しかしイエスの言葉は当然また、神の救いを、メシア（救い主）の到来を、長く待ちつづけた、当時のイスラエルの在り方についての言葉としても、理解することができません。そうすると、今日の箇所の、とくに後半の譬えで取り上げられている、というより、やり玉に上げられているのは、ファリサイ派や律法学者たちのことであるようにも見えます。

そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、主は言われた。「主人が召し使いたちの上を立てて、時間どおりに食べ物や分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。確かに言っておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思えば、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、その僕の主人は、予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。主人の思いを知りながら何も準備せず、ある

いは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどくむち打たれる。しかし、知らずにむち打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される」（四一―四八節）。

いまお読みした、最初の、ペトロの質問（四一節）に対して、イエスは直接答えていません。しかし否定もしていません。ですから「みんなのため」に語られたと受けとってよいと思います。弟子たちだけではない。ここに集まっている群衆にも、ファリサイや律法学者にも語られているのです。

この部分には、譬えというより、寓話というのでしょうか、一種の教訓話のような書き方が見られます。

そうすると、だれかを、何かを、当てつけているわけです。ぴったり当てはまるわけではありませんが、たとえば「食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、その僕の主人は、予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる」（四五節）というようなくだりは、あの「愚かな金持ち」（一六節以下）のことを思い出させないでしょうか。彼もまたイスラエルの救いを待つことに失敗した人です。

さらに、「主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどくむち打たれる」（四七節）というようなところでは、ファリサイ派や律法学者のことが思い出されます。律法を通して、あるいは預言者の言葉を通して、神はイエスラエルに、救いを語りつづけたのです。メシアの現れを語りつづけたのです。しかしファリサイ派、律法学者は、まさに「主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕」と、言わざるをえないのです。彼らも、イスラエルの救いを待つことに失敗した人たちです。確かに彼らには「多く与えられた」、多くの責任を託された、と言ってよい。それゆえ彼らは、多く求められるのです。ファリサイ派の人々も律法学者も「忠実で賢い管理人」となることを期待されていたのです。

しかし彼らは、そうなることに失敗しつつあったのです。この時代のイスラエルには、例えば、シメオンやアンナのような、救い主の現れるのをひたすら待ち望んでいた敬虔な人々が多くいたことを私どもは知っています（三・二五以下）。彼らに「忠実で賢い管理人」であることが期待されていたわけではありません。しかしファリサイ派や律法学者には、それが期待されていました。しかし彼らはそれに相応しくないことが明らかになっていったのです。

3 僕としての主

さてもう一度、今日のイエスの言葉を、今の時を生きる教会のための言葉として考えてみたいと思います。復活したイエスが、天に昇り、いま天にいます、父なる神の右にいます、今のこの時のこと、この、いわば教会の時のための言葉として考えてみたいと思います。

今のこの時、この教会の時、イエスがもう一度世に来られることによって終わりま
す。イエスは来られます。しかしいつ来られるか分からない。それは、いつ来てもお
かしくないということです。私どもは、私どもの個人の終わりに対すると同じく、こ
の世の終わりにつねに直面しているのです。終わることへの自覚に立って歩むよう
に、イエスは語っているのです。

主人が婚宴から帰って来て戸をたたき、すぐに開けようと待っている人のよ
うにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕た
ちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席
に着かせ、そばに来て給仕をしてくれる。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰
っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ（二六―二八節）。

ここに描かれているのは、終わりの時のことです。イエスに招かれた、イエスを主
とする食卓の交わりとして描かれています。

この食卓の場面、ここに、とくに注目を引くところがあります。「主人は帯を締め
て、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕をしてくれる」（三七節）。聞
き逃すことのできない言葉です。

この神の国の食卓の主人は、忠実な僕たちを招きます。招いただけではない。主人
が「給仕」というのです。ここで、主人は僕となります。同じことをイエスは最
後の晩餐の席でも語っています。

食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではな
いか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である（二二・二
七）。

イエスはもう一度来られる、そのときのことです。私どもは主の食卓にあずかるの
です。罪人である私どもは招かれて、食卓の客となります。しかし招いた主ご自身が
僕として給仕し、身を低くし、私どもに仕えてくださるということです。主が自分を
低くなさることによって私どもは高められます。私どもまことに罪深い者たちが、そ
れによって引き上げられます。

しかしこの事態は、イエスがもう一度来られるときにはじめて起こることではあり
ません。私どもは、イエスの十字架の死のことを考えるべきです。それは、主が僕と
なって、私どもと同じところに立たれることです。私どもと同じくなることです。私
どもの罪をご自身が担うことです。そして私どもから、それを取り除いてくださるこ
とです。そしてそれに代わって、神の命を私どもに与えてくださるということです。私ども
は神へと高く上げられます。

この、イエスがもう一度来られて起こること、それは、すでに、今ここで、この世
で、イエスの十字架で起こったことです。主が僕となったことを私どもも深く受けと
めて、教会も、主に、そして隣人に、世に仕える道を歩んでいくことができれば、幸
い입니다。

（一月二三日）